

『己亥歳』 曹松

ひとり歩きする名句「一将功成り万骨枯る」

己亥歳 曹松  
己亥の歳 曹松

澤國江山入戦図  
沢國の江山 戦図に入る

生民何計樂樵蘇  
生民何の計りごとあつてか  
樵蘇を樂しまん

憑君莫話封侯事  
君に憑る話すこと莫れ  
封侯の事

一将功成萬骨枯  
一将功成り 万骨枯る

【意解】

長江一帯の水郷の山川も、とうとう戦場になつてしまつた。民衆は、そのたきぎをとり草を刈る、ささやかな生活を樂しもうとするのに何のてだてもない。

貴方をお願いしたいが、武功をたてて諸侯に封ぜられるようなことは、お話しくださるな。一人の将軍が手柄をたてるとき、その裏には無数の人々の無益な死があるのだから。

【作者】曹松(八三〇?~九〇二?)

晩唐の詩人で、字は夢徴。賈島に詩を学び、約一四〇首の詩が現存する。若い頃は洪都(広西省南昌)の西山に隠棲し、職もなく、中年頃から所々を放浪、一生貧しい生活に苦しんでいる。九〇一年、七十余歳にしてようやく進士に及第し、秘書官となつたが、間もなく没したという。

【字解】

己亥歳 「つちのと・い」の年。晩唐では僖宗の乾符六年(八七九)がこの干支にあたる。

沢國 川や湖沼の多い低湿の地方。ここでは荊楚江淮地方(四川・湖南・湖北・安徽・江蘇の各省にわたる長江一帯)をいう。

樵蘇 「樵」はきこり。「蘇」は草刈り。戦功によつて領地を与えられて出世すること。

この言葉は、後漢の班超の故事に基づく。班超は若いころ貧しく、筆耕で生計を立てていたが、ある日「傅介子や張騫は西域で手柄を立てて諸侯となつた。男子たるもの、このように筆や硯を弄んでいてはだめだ」と発憤し、西域に赴いて活躍すること三十年、ついに定遠侯に封ぜられた(後漢書「班超伝」)。

【背景】唐王朝を滅亡に追い込んだ黄巢の乱

唐末には大小無数の騒乱があり、なかでも大規模なものが黄巢の乱であった。

山東の王仙芝（中国唐代の反乱指導者の一人）は若いときから塩の密売に関わっていた。唐朝は塩を専売制にしていたが、財政窮迫の安易な解決策として、とめどなく塩を値上げし、塩の闇取引を厳しく取り締まった。これに反抗して王仙芝は

八七五年に数千人を集めて拳兵し、各地を陥落させ、数万の軍勢に達した。塩の密売人仲間の黄巢も数千人を率いて参加、三年後の王仙芝の敗死後は黄巢が叛軍の指導者となって江南へ向かい、広大な荊楚江淮地方を荒らし回り、広州



唐代の製塩の様子

在住のアラビア商人ら十万人を殺害略奪するなどして大混乱に陥れた。

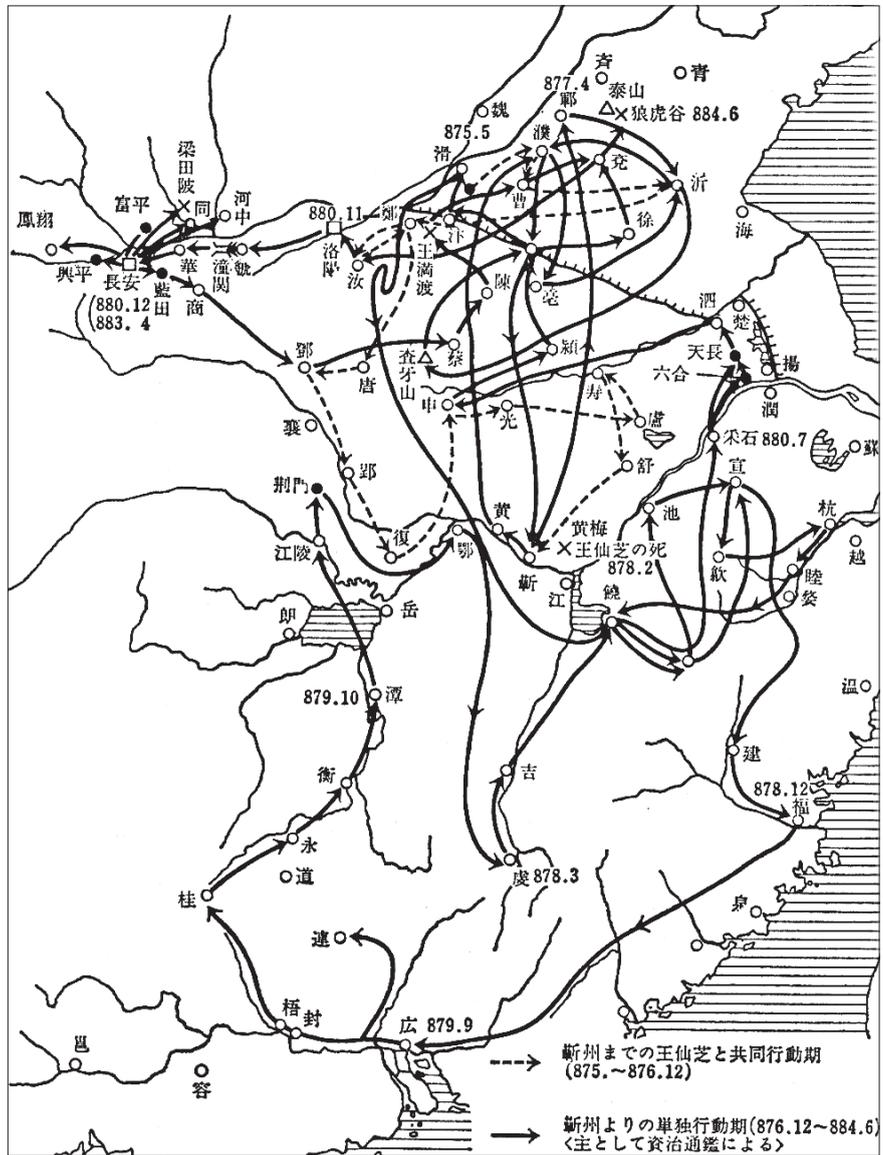
一方、政府側の將軍たちも、本質的には賊軍の首領と大差なく、騒乱に乗じて勢力の拡大を図るようなものがあった。唐の帝位を奪った梁の太祖、朱全忠（朱温）も、のちに梁に代わる後唐の基礎を築いたトルコ系武將の李克用も、この黄巢の乱のなかで成長した軍閥である。

黄巢の軍はいよいよはつきり「唐王朝打倒」を旗じるしに掲げて北へ向かい、各地で藩鎮の軍と攻防を繰り返しながら侵攻し、八八〇年には洛陽を経てついに長安を占領、破壊と殺戮の限りを尽くした。僖宗は四川へ逃れ、黄巢が即位して国号を齊と号した。

李克用の軍と黄巢が争う間に都長安は壊滅。やがて李克用と朱全忠の軍は黄巢を山東へ追いやり、十年にわたる大乱は平定された。その後、朱全忠は李克用との争いに勝ち、九〇七年、皇帝となって（後梁の太祖）、ここに唐王朝は滅亡したのである。

【鑑賞】王昌齡の七言絶句「閨怨」が下敷きに

「已亥歲」は、將軍たちが功を争う間に、人民が犠牲となって塗炭の苦しみを味わうことを歎じている。特に転句の「君に憑る話すこと莫れ封侯の事」は、王昌齡の七言絶句「閨怨」が下敷きになっていよう。



黄巢の乱の活動図

忽ち陌頭 楊柳の色を見て  
梅ゆらくは夫壻をして  
封侯を覓めしめしを

部屋の中の若妻は、春の日にお化粧して高殿に上る。ふと道端の柳の木を見て、出征の夫に出世をせがんだことを悔やむ。

この詩の後半の「封侯を覓めしめしを」すなわち「諸侯に取り立てられるようにがんばってね」と夫を励まして送り出した若妻の悔恨を承けて、曹松は若夫婦の会話として「諸侯になどならなくてもいい。戦争にいくのはやめて、傍にいてほしい」と、若妻に語らせているのであろう。

「己亥歳」、すなわち乾符六

年（八七九）は「黄巢の乱」が最も燃え盛っていた時期であり、この詩には、そういう戦乱の時代に生きて、貧苦な生活に甘んじた作者の心情が投影されているよう。曹松に

閨怨 王昌齡  
閨中の少婦 愁いを知らず  
春日粧いを凝らして 翠楼に上る

とって「万骨枯る」は決して人ごとではなかったにちがいない。

【考察】現代にも生きる「一将功成り…」の句

第四句の「一将功成り万骨枯る」（あるいは「功成つて……」）は独立した名句であり、この詩の主眼である。

現代の世の中でも、いわゆる「一将功成り万骨枯る」に通ずるような構図は随所に見られる。たとえば世界の国と国との関係に、産業・企業・政党・団体間の競争のなかにも「万骨」の犠牲の上に「一将」だけが成功するさまを見て、人はその出典である「己亥歳」を意識することなく、この名句を口にするようである。

## 【参考】

### ① 「三体詩」

南宋の周弼しゅうへいの編集した唐代の詩集。七言絶句、七言律詩、五言律詩の三つの形式（三体）に限り、唐の一六七人の作、四九四首を収めている。

代表的な詩人としては、許渾きよこん、杜牧とほくなど。南宋末の一二五〇年の刊行といわれる。

「唐詩選」が初唐や盛唐の詩を重点的に採用しているのに対し、「三体詩」は多く中唐から晩唐にかけての詩を選

ぶ傾向が強い。

### ② 「干支」

平成二十八年（二〇一六年）は丙申（ひのえさる・ヘイシン）の年となる。

中国では古来、十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と、十二支し（子ね・丑うし・寅とら・卯う・辰たつ・巳み・午うま・未ひじ・申さる・酉とり・戌いぬ・亥い）を組み合わせ、年や日の呼び名としている。

「甲子」から始まって六十通りあるが、この紀日法は、朝鮮、日本等でも使用され、現在でも周の時代に定めた最初の「甲子」から順序をたがわず使われ続けている。日本の「壬申の乱」「戊辰戦争」、中国の「辛亥革命」なども「干支紀日法」による表現である。

### ③ 「六十干支表」の読み方

十干は、陰陽五行説とつながって、甲き・乙きのえ・丙ひのえ・丁ひのえ・戊つちのえ・己つちのえ・庚かのえ・辛かのえ・壬かのえ・癸みずのえと呼ばれた。

十二支は、中国で古くから暦の月の呼び方や、時刻、方角にも使われた。もともとは十二ヶ月の順番を示すただの符号であったが、のちに動物に結びつけられた。

ここに掲げた表の「ひらがな」は日本式の読み方、「カタ

カナ」は音読みで、左から右、上から下へ順に並べてある。習慣で「弟」と十二支名の読みの間には「の」を入れて呼ぶ。

なお、十干十二支すべての組み合わせがあるわけではない、十干の「甲・丙・戊・庚・壬」と、十二支の「子・寅・辰・午・申・戌」十干の「乙・丁・己・辛・癸」と、十二支の「丑・卯・巳・未・酉・亥」が組み合わされるため、六十干支となる。表の最後、癸亥の次は最初の甲子に戻って繰り返す。

このように六十年で干支が一回りするため、六十歳になることを還暦を迎えるという。

(国立天文台暦計算室)

### 六十干支の読み方

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
0	きのえ ね	きのとの うし	ひのえ とら	ひのとの う	つちの えたつ	つちのとの み	かのえ うま	かのとの ひつじ	みずの えさる	みずのとの とり
	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉
	カウ(コ ウ)シ	イツチュ ウ	ヘイン	テイボウ	ボシン	キシ	コウゴ	シンビ	ジンシン	キュウ
10	きのえ いぬ	きのとの い	ひのえ ね	ひのとの うし	つちの えとら	つちのとの う	かのえ たつ	かのとの み	みずの えうま	みずのとの ひつじ
	甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未
	コウジ ユツ	イツガイ	ヘイン	テイチュ ウ	ポイン	キボウ	コウシ ン	シンシ	ジンゴ	キビ
20	きのえ さる	きのとの とり	ひのえ いぬ	ひのとの い	つちの えね	つちのとの うし	かのえ とら	かのとの う	みずの えたつ	みずのとの み
	甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳
	コウシ ン	イツユウ	ヘイジ ユツ	テイガイ	ボシ	キチュウ	コウイ ン	シンボウ	ジンシン	キシ
30	きのえ うま	きのとの ひつじ	ひのえ さる	ひのとの とり	つちの えいぬ	つちのとの い	かのえ ね	かのとの うし	みずの えとら	みずのとの う
	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯
	コウゴ	イツビ	ヘイン ン	テイユウ	ボジュツ	キガイ	コウシ	シンチュ ウ	ジンイン	キボウ
40	きのえ たつ	きのとの み	ひのえ うま	ひのとの ひつじ	つちの えさる	つちのとの とり	かのえ いぬ	かのとの い	みずの えね	みずのとの うし
	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑
	コウシ ン	イツシ	ヘイゴ	テイビ	ボシン	キュウ	コウジ ユツ	シンガイ	ジンシ	キチュウ
50	きのえ とら	きのとの う	ひのえ たつ	ひのとの み	つちの えうま	つちのとの ひつじ	かのえ さる	かのとの とり	みずの えいぬ	みずのとの い
	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥
	コウイ ン	イツボウ	ヘイン ン	テイシ	ボゴ	キビ	コウシ ン	シンユウ	ジンジュ ツ	キガイ